

田園景観の保全を目的とした景観イメージパースの活用についての研究

九州大学工学部建設都市工学科 学生会員 三好 孝明

九州大学大学院工学研究科 正会員 樋口 明彦

九州大学大学院工学研究科 フェロー会員 太田 俊昭

1. 本研究の背景

今日、我が国では環境に配慮したゆとりある地域づくりが重要視されるようになってきており、それにあわせて、一般市民が地域の計画プロセスやデザインプロセスに積極的に参加していく流れがワークショップなどの試みを通して各地に生まれつつある。こうした流れの先進国である米国では、専門的な知識を持っていない住民にも地域マスターデザインの作成過程に積極的な参加を促進するために様々なツールが提案されてきている。その一つとして、現在の状況と予測される将来の状況をそれぞれ示して比較した景観イメージパースを用いることが1980年代から行われている。図-1は、その最初の試みとして、1988年にマサチューセッツ州コネチカットリバー溪谷地域のために作成された景観イメージパースである。ここでは、三枚のパースがそれぞれ①：典型的な現在の地域状況、②：何ら開発コントロールがなされなかった場合に予想される将来の状況、③：景観や地域の環境に配慮した手法で②と同じ規模の開発を誘導した場合の将来の状況、をそれぞれ示している。これら三つのイメージを見比べることによって、住民が地域の将来イメージを容易に理解し、ディスカッションに参加しやすいように工夫がされている。

日本でもゆとりある地域づくりをおこなっていくに当たり、住民の積極的な参加を促す手法が必要とされている。しかし、今まで住民への説明で用いられてきた一般的な手法では、都市計画における専門的な数値や

図面を用いたものがほとんどで、専門的なものに慣れていない住民にとって十分に地域の将来をイメージできるものとなっていないのが現状である。

本研究では、福岡県西部の志摩町をケーススタディとして、景観イメージパースが今後日本において住民参加を促す上で有効な手法として用いることができるかについて評価を行った。

2. 景観イメージパースの有効性

福岡市の西部に位置する志摩町は、海に囲まれ多くの自然が残されており、豊かな田園が広がる美しい地域である。しかし、数年後に九州大学の移転が予定されており、それに伴って人口の急激な増加が生じ、大規模な開発圧力が加わることが予想されている。筆者の所属する九州大学大学院環境デザイン研究室では、志摩町のこうした状況の中で、開発と環境保全のバランスを上手く取りながら、どのように地域づくりを進めていくべきかについてのスタディをおこなった。その中で、コネチカットリバー溪谷地域で用いられた景観イメージパースを使用した手法を試行的に用いた。そして、スタディの結果を町に対して説明する際に、この手法の有効性についてアンケートを採った。アンケートに回答してもらったのは、町役場の課長以上の職員11名である。また、同様の説明を本研究室の学生10名に対してもおこない、同じくアンケートを採った。

説明の際に用いた三枚一組の景観イメージパースは図-2の上段に示しており、下段の三枚の平面図は上段のパースと同じ状況をそれぞれ表している。これらは

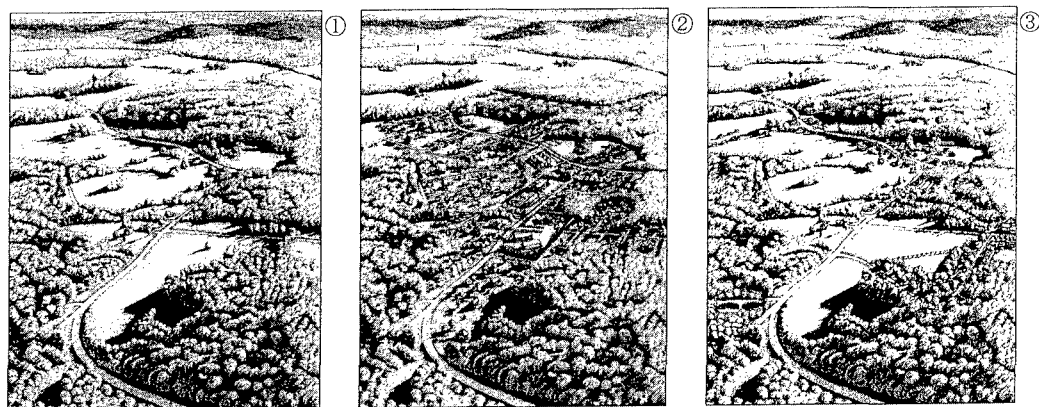


図-1 アメリカで用いられた景観イメージパースの一例

左から、典型的な現状、従来の開発が無秩序に進行した場合の将来イメージ、新しい開発手法を取り入れた場合の将来イメージの三つの異なる状況を比較できるように作られている。典型的な現状では、里山のすそのに多くの既存集落が存在し、それらの背後の傾斜地には棚田やため池、果樹園跡がある状況を描いている。従来の開発によるイメージでは、田園風景を担保しているまとまった農地が宅地造成によって寸断されて、風景の連続性が失われた状況を描いている。新しい開発手法による将来イメージでは、果樹園跡に低密度な宅地開発を誘導し、景観上十分な緑化をおこなって田園風景を保全した状況が描かれている。

アンケートの内容は、①：このような景観イメージパースを用いたツールが住民参加を促す有効な手段となり得るか、②：三枚一組の景観イメージパースと平面図を比較した場合どちらの方が将来イメージを把握しやすいか、についての二点である。

アンケートの結果は二度ともほとんど同一の傾向を示しており、それらを整理すると図-3のようになる。質問①に対する回答結果では、ほとんどの人が有効または大変有効であると答えている。また、質問②に対する回答結果からは、景観イメージパースは一般の人にとって奥行きや高低差などが分かり、スケール感が掴みやすく、立体的に状況を理解でき、平面図に比べ明確な空間のイメージが浮かびやすいことが確認できた。

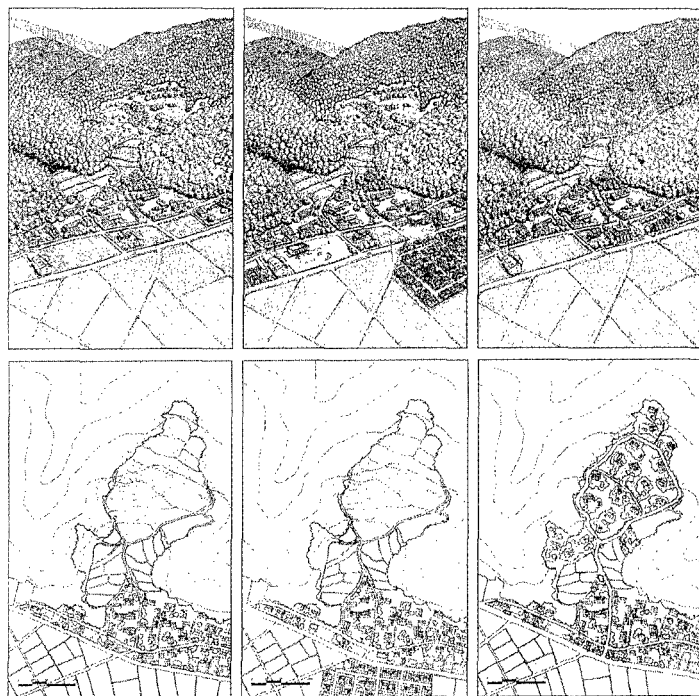


図-2 今回用いた景観イメージパースと平面図

3. まとめ

米国と我が国では、土地利用形態や開発の形態、地形などの多くの面で異なっているが、米国で提案された景観イメージパースを用いた手法が、我が国でも地域づくりを進める上で有効なツールとなり得ることが確認された。今後は一般の住民に対してもアンケートを行い、手法の有効性をさらに広く確認していきたいと考えている。また、この手法は将来的には現在発展のめざましいCG技術を用いることにより、一つの方角だけでなくあらゆる角度から将来イメージの比較をすることで、住民にとってさらに分かりやすく身近なツールとしていくことが可能である。現在は、まだコスト面や作業効率などに問題があるため実現はむずかしいが、今後の技術展開に期待したい。

参考文献：

Robert D. Yaro, *Dealing With Change in the Connecticut River Valley: A Design Manual for Conservation and Development*, the Lincoln Institute of Land Policy and the Environmental Law Foundation, 1988.

landscape architecture, may 1996, volume86, number5, p66-73.

トニー・ヒス（谷村秀彦、樋口明彦訳）：都市の記憶、井上書院、1996

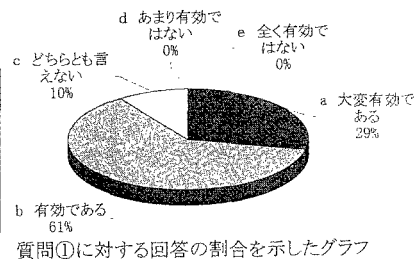


図-3 アンケート結果

質問①で有効であると回答した理由として最も多かったのは、視覚的に地域の変化する状況が理解できるため、誰にでも分かりやすいのではないかとあつた。